

## 続 仮面と憑依

### — 地域の祭りにおける仮面の役割

倉石あつ子

昨年度の『人文学フォーラム』第七号には、長野県下伊那郡阿南町新野の雪祭りを取り上げ、祭りの流れとその中における仮面を用いた舞について考察した。同じような祭りは韓国各地にもあり、本稿は日本と韓国の「仮面と憑依」を比較するよう当初の原稿依頼であった。しかし、紙幅の関係上、昨年度は日本の雪祭りにおける仮面の用いられ方に関する記述で終わってしまったので、本稿は昨年度の継続稿という位置づけで、韓国における仮面の用いられ方について日本と若干の比較を試みることにする。

### 3 韓国における仮面を用いた祭り

韓国では祭りの折に「仮面劇」あるいは「タルチュム」などと呼ばれる仮面を用いた劇が演じられるが、村人が代々受け継いで伝承しているものと専門の演者が公演して歩いたものとに分けら

れる。本稿では、村人が受け継いで伝承してきた仮面劇に絞ってみていくこととするが、それらには楊州山台ノリ、松坡山台ノリ（一九七三年重要無形文化財第49号指定）、鳳山山台タルチュム（一九六七年重要無形文化財第17号指定、康翎タルチュム、殷栗タルチュム（一九七〇年重要無形文化財第34号指定）、水宮野遊（一九七一年重要無形文化財第43号指定）、東萊野遊（一九六七年重要無形文化財第18号指定）、統宮五広大（一九六四年重要無形文化財第6号）、固城五広大（一九六四年重要無形文化財第7号指定）、駕山五広大（一九八〇年重要無形文化財第73号指定）、河回別神クッタルノリ（一九八〇年重要無形文化財第69号指定）、江陵官奴仮面劇（一九六七年重要無形文化財第13号指定）、北青獅子ノリ（一九六七年重要無形文化財第15号指定）などがその代表的なものとして存在している。これらの中には、日本支配下において集会の禁止や、

朝鮮戦争（韓国では六・二五と呼ぶ）によって一時期中断し、解放後あるいは休戦後に復活したものも多い。また、六・二五の折に、北から南に避難した演者たちによって持ち伝えられたものも含まれている（地図参照）。

総称して仮面劇と呼んでいるが、地域によってノリ・タルチュム・野遊・五広大などの呼び名がある。いずれも手作りの仮面などをを用いて、いくつかの場面Ⅱ科場が演じられる。科場の場数は地域によって異なり、数場から十三場ぐらいに分けられて演じられている。また、これらの仮面劇の起源についても韓国においてさまざまな資料を用いた検討がされているが、今尚これといった決め手はみられないようであり、山台都監劇系統説・豊農クツ起源説が有力とみなされている<sup>1)</sup>。

こうした仮面劇に共通する科場もまた起源説同様、様々な分類ができるようであるが、おばあさんが登場する科場、両班が登場する科場、破戒僧が登場する科場などが共通している。こうした登場人物にいろいろな台詞をはかせるが、総じて両班や学者・僧侶といった身分の高い者あるいは識者と思われる者に対する皮肉・からかい・侮辱などがこめられたものであることが多い。貴族や両班によって支配され身分制度が明確であった韓国社会の中で、日ごろの鬱憤を晴らす絶好の機会が仮面劇であったとも言われ、地域社会で行われる祭りの後の仮面劇だけでなく、大道芸人たちが常にそうした意識を持って演じていたらしいことが、ドラ

マなどにも描かれている<sup>2)</sup>。

仮面劇の中には、江陵官奴仮面劇のように台詞がなくパントマイム形式のものもあるが、本稿では日常会話のように見物客を巻き込んで会話をしたりする安東市河回村の仮面劇を取り上げて見て行くことにしたい。河回村の別神祭クツをみなければ、死んでも良いところには行かれないと言われており、村の人々だけでなく近隣の人々が河回村の縁故を頼って見物に出かけてきたものだという。仮面劇はこのクツの中で行われるもので、本来は神迎え・本儀・神送りに分けられる祭りの中の、本儀の部分で行われたものというから、後に述べる現行のような余興的な要素の強いものというより、神をもてなす為の祭儀の一部であったことが伺える<sup>3)</sup>。

### (1) 安東市河回村概要

安東市河回村<sup>1)</sup>は慶尚北道安東市の北西に位置し、ソウルから高速バスで安東駅まで二時間半、駅からバスで三〇分余の距離にある。洛東江が村を抱きこむように蛇行している。背後に山をいただし、前面には満々と流れる川という、風水で良いとされる背山臨水の思想に基づく典型的な地形に構成された村であることが見て取れる。両班柳氏の本拠地とされ、別神祭クツの折に神を祭る広場三神堂及び両班の宗家柳氏の家を中心にほぼ円を描くように家々が存在している（写真1）。

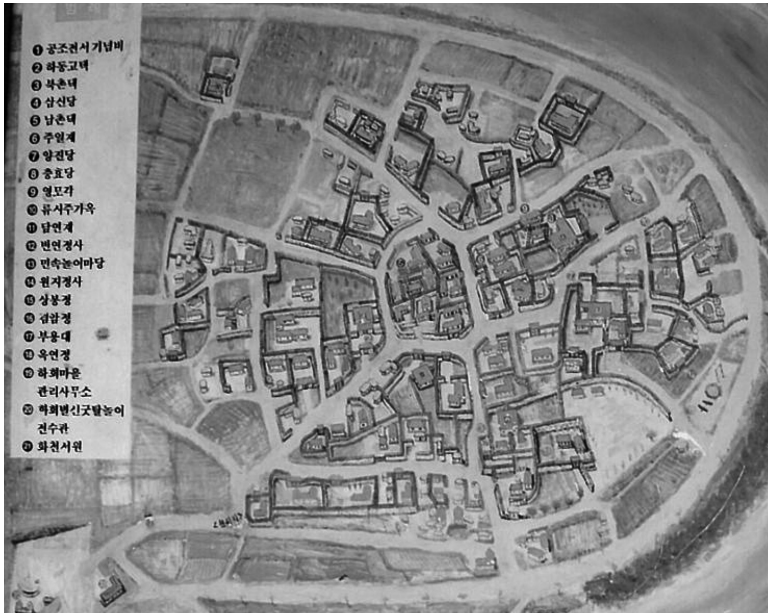


写真1 村の入り口にある住宅配置図

円の中心には両班、外側へ中人・常民・賤民という順の構成になっており、家の大きさを見ればその身分も凡そ推測できる。村は景観保護区域に指定されているため、かつての身分制度の在りようまで推し量れてしまい、中心に家をもつ人々と外縁に家のある人々のそれぞれの関係はどのような意識上にあるのかは、稿を改めて観察してみたい事柄である（写真2・1・2 大きな家小さな家）。

村は農業が主たる生業であるが、現在、若者たちはサラリーマンとして安東市や慶州市・釜山市・ソウル市などへ出ているものも少なくない。また、現在は村の中の何軒かが民宿を営んでおり、日本人観光客などの宿泊客も多い。村全体が博物館のような状態で、人々が生活している姿と「昔懐かしい韓国の田舎の生活」を体験できる村として観光化が進んでいる。例えば、筆者が宿泊したチュ・ミスおばあさんの「静かな民宿」も息子たち家族は外に出ていて、おばあさんが近くに住む義妹の助けを借りながら民宿を営んでおり、息子たち夫婦は休日を利用しては帰宅して、農業のできないおばあさんを助けていた。村の中にはこうした民宿が十数軒あり、ときにはソウルあたりから来る小学生や中学生の合宿も受け入れている（写真3 民宿入り口）。

村の入り口には観光用の長柱が立ち、観光案内所も開設されている。また、入り口にはこの村が、どのような家々の構成からなるかが一目で分かる航空写真も飾られている（写真1参照）。現在



写真2-1 両班の家 養真堂と呼ばれる柳家 2-2と比較すればその規模の違いは一目瞭然である。



写真2-2 外側に位置する小さな家

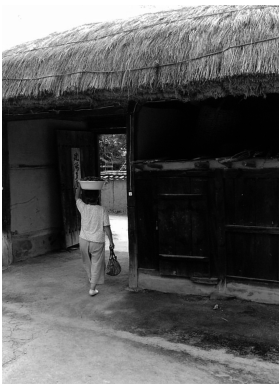


写真3 民宿入り口 門の屋根も藁葺き



写真4 村の入り口にある土産物屋

はインターネットでの口コミ紹介や、各民宿のホームページも開設され、それぞれの民宿の食事なども比較することができる。二〇〇四年に初めてこの村を訪れたときには、冬場であったこともあり食堂などはバス停前に一軒あるのみであったが、三年後の夏訪れたときには食堂やみやげ物屋などが数軒できており、より観光が進んでいることが伺えた(写真4・5・6・7)。

## (2) 河回村仮面劇概要

現在、河回村の仮面劇は観光客用に三・四・十一月は毎週日曜日一五時から、五月から一〇月は毎週土・日曜日の一五時から公

演が行われているが、実際は十年ごとに神託を得て臨時に行う別神クツのときに行われるものとされていた。この祭りは戌辰生まれの城隍神を祭るものである。「戌辰生まれの城隍さま」とも言われ、十七歳の処女義城金氏であるとか、十五歳で未亡人になった城隍神とかいわれ、村を守る三神(産神と記述する場合もある)の嫁に当たる神とも言われている。別神クツは、村に異常があるときなどにも行われたため、十年の間をおかず三年とか五年で行われることもあった。別神クツとは別に毎年正月十五日と四月八日に例祭が行われ、これを洞祭と呼んでいる。

別神祭を行うか否かは前年の陰暦十二月十五日に神の意思を問



写真5 土産物屋横にある長柱 訪れるたびに増えている。仮面の表情との関わりも考察しなければならないが、今回はそこまで考察が及ばなかった。



写真6 村の外側の家が営業する食堂兼土産物屋



写真7 三神堂前の神木 ここで仮面劇が行われることもある

う。まず、山主（サンジュウ宮司にあたる）が山に登って神に伺いを立て、神託があると初めて祭りの執行が決まる。神託が降りると山主は村に帰り、村人たちに知らせて不浄のない大工に命じて城隍竿（長さ四〜五メートル）と降神竿（一メートル）と呼ぶ神聖な木を選定させるとともに、祭りに使用する道具類や楽器の点検などを始める。十二月二十九日に村の代表が洞舎に集合し（このとき両班の宗家である柳氏は参加しない）、有司（祭において会計を担当するとともに雑用を引き受ける人）二名、広大（演技者）十二名、船子などの選定が行われ、選定された者にはすぐに通知がされる。一戸から一人だけクツに動員されても生業に支障

がないような人選がされるが、上記の役に選定された者は選定されたことが神の意志として拒むことはない。拒むことは神の意志にそむくことであり、意志に背けば城隍神の怒りをかうと信じられていた。そして、翌十二月三十日から洞舎で寝泊りして、禁忌を守り練習を行う。

こうして準備が整うと、翌十二月三十一日（正月二日であることもある）に上堂（城隍堂とも呼ぶ）に山主・広大が上って神降ろしを行う。上堂は村はずれの山の上の山にあり、山主が鈴を取り付けた城隍竿を握って神の来臨を祈る。鈴がなると神が降りた印とし、城隍竿を先頭に山主・閻氏（城隍神の象徴役）このときは仮

面をつけていない）・廣大・農楽隊の順に行列をつくり、農楽を奏でながら、中堂、下堂を経てさらに村の中を練りながら洞舎前の広場で仮面劇を始める。年によって、三神堂前の広場で行うこともあった（写真7）。

洞舎は仮面を治めて保管しておく場所であり、廣大たちが祭までこもる場所でもある。広場は仮面劇を行う場所でもあったが、火災にあつて以降、仮面は山主の家で保管するようになった。さらに一九六四年に国宝121号に指定され、現在は国立中央博物館が所蔵している。河回村で使用された木製仮面は田耕旭によれば、韓国的な表情で、韓国人の骨格や容貌を見事に表現しているものが多く、制作年代は高麗時代中期（十一〜十二世紀）まで遡ることができるという。現在使用されているものは、その後改めて作られた仮面である。

河回村の仮面劇は日帝時代の一九二八年以降途絶えたが、一九七三年に安東市の有志によって保存会が結成され、一九七四年の一年間をかけて廣大を演じた経験者である朴寿斤への聞き取り調査を行い、一九七七年に復元されることになった。さらに一九七八年に成炳禧らによって閻氏を演じた李昌熙への聞き取り調査を行うことよって、その内容は朴寿斤の伝承と比較することができるとなり、科場の順番などにも影響を与えることとなった。倉石美都「韓国仮面戯にみる円の象徴性」（日本大学大学院芸術学

研究科修士論文二〇〇四年）によれば、二人の伝承の差が一覧表によって比較されているが、互いの伝承が補い合つて復元を可能にしていることが分かる。

では、実際に仮面劇はどのように演じられているのか、そして、どのような仮面が用いられているのか、おおよその順序を科場にしながら見ていきたい。

### （3）仮面と科場

農楽隊の音が遠くに聞こえると、村の人々は洞舎の前の広場に集まってくる（現在は特設会場で行われる）。科場は第一科場から第五科場で構成されているが、第一科場が行われる前に、仮面をつけた閻氏が仮面をつけて舞童（肩車をしてもらつて立ったまま両手を動かす舞）をしながら、観客の前を回つて乞粒（喜捨）をする。この乞粒がおわると、いよいよ仮面劇が始まる。閻氏は非常に格の高い神なので、土につかないよう常に人の肩の上に乗つて演技を行う。処女役なので、顔の表情が生硬表情をしているといわれている。榛の木で作られている。

#### ①第一科場 チュジチュム（獅子舞）

つがいのチュジが登場し、頭を振りながら舞台の四方を駆け回る。悪鬼猛獣を追い払うとされている。このチュジは李昌熙によれば、体は竜、頭は虎を模したものとして伝承されている。田耕



写真8 闇氏 [www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm](http://www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm)による



写真9 白丁 [www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm](http://www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm)による



写真10 白丁に殺される牛 斧で殺されごろりと横たわったその体から牛囊を切り取り白丁は精がつくと売り歩く [www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm](http://www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm)による

旭は、「獅子は百獣の王であり、仏教における文殊菩薩の使者なので、雑鬼を追いやり災いをはらうことのできる存在と認識されている」と解釈している。チュジは、両班の下人チョレインによって追い払われる。

このチュジの仮面は鄭台鉉教授の鑑定によると、榛木を使用しているものとされている。<sup>(8)</sup>

## ②第二科場 白丁ノリ(写真9)

仮面名を「死刑執行人」というように、身分の低い賤民役である。先に牛が登場し、その牛を追いかけて白丁が登場する。牛を

見つけると背負い袋から斧を取り出し、刀を振り回して牛を殺す。殺した牛から牛囊を切り取り、観客の間を回って牛囊を売りつける。白丁は、観客の中のものなるべく若い娘などを選んで売りつける。若い娘たちが恥ずかしげな顔をするのを喜ぶ。現在は特設会場で演じられるため、演者はマイクをつけており、会話のやり取りは会場中に響く。乞粒を求められるのは、観客の前列に座っている人たちが対象となり、観客もそれを覚悟で行く。乞粒されて何も渡さなかったりすると「えーい けちだなあ。この寧丸を買おうといいことがあるのに、若い娘は恥ずかしがつて……本当は凄く欲しいんだろ」などといった言葉でなじられる。

卑猥な言葉をお口にすることで日常生活の鬱憤を晴らす、下層階級の民の様子が伺える。

朴寿斤氏からの聞き取りでは、順序が異なり、破戒僧ノリがここに来ることになっている。朴氏の伝承によれば、現在行われている第四科場と第五科場がここで演じられるのだと記憶されている。その内容は「プネという娼婦が登場し、会場を一回りした後、尿意をもようし小便をする。その様子を見ていた破戒僧が、シヨウベンした後の土の匂いを嗅ぎ、性的興奮を覚え、プネを負ぶって逃げる。それを両班と学者が見て世相を嘆く。次の科場では両班とソンビ（学者）がプネを巡る三角関係となり、プネを巡って争っているところに白丁が牛の糞丸を売りに登場する。（糞丸は精力剤となるので）両班とソンビは争って買おうとして糞丸を引っぱり合う。白丁は糞丸が裂けてしまうと怒り、そこに登場したハルミが争いを止める」というもので、現在それぞれに分けられて演じられている科場の要素が、この科場で凝縮して演じられるとともに、順序もかなり異なっていることが分かる。朴氏の伝承によれば、この科場から次のハルミへと繋がり、現在の第二科場である白丁ノリつづいて還子ノリ（管理が税を徴収し、中間搾取する）へと進むことになっている。

③第三科場 ハルミ（婆さんノリ）

ひさごを腰に下げた婆さんが平民階級の老婆服色のチョゴリと



写真11 ハルミが登場する  
[www.pusannavi.com/miru/1190](http://www.pusannavi.com/miru/1190)



写真12 ハルミ [www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm](http://www1.parkcity.ne.jp/ito-jun/kamen/kamen.htm)による

灰色のチマを着て足音を響かせながら登場し、機織をしながら一生貧しく辛い生活を送る身の上を嘆き歌う。歌の中には村の様子も入れて歌われるので、機を織っている婆さんが庶民の生活の状況を代表して生活の辛い様子を嘆いていると見ることが出来る。仮面の顔前面だけに緑色の斑点がつけられているのが特色で、生活に疲れた老婆をより象徴的に表現している。

④第四科場 プネスン（破戒僧ノリ）

娼婦プネが女らしく腰をなよなよとくねらせて登場し、会場を一回りした後、尿意を模様して小便をする。それを陰で見ていた





写真13 破戒僧とブネ



写真14 匂いをかぐ破戒僧  
www.pusannavi.com/miru/1190



写真15 両班とソンビ



写真16 ソンビの下僕イメ (注9)

破戒僧がブネのショウウベンの後の土の匂いを嗅ぎ、大喜びする。そして僧はブネを脇に抱えて急いで退場する。

この科場の二人の演者にはまったく台詞がなく、動作のみで表現している。

⑤第5科場 ヤンバン・ソンビノリ (両班・学者ノリ)

両班とソンビ (学者) がブネを間におき、お互いの身分や学識の高さを自慢する。両班は下僕チョレインをソンビは下僕イメを従えており、下僕たちは両班とソンビの間をうろうろしながら、話に口を挟む。例えば以下のような会話を行う。

ソンビ…私は学識があるので、四書三経を読んだぞ。  
両班…うん？ 四書三経？ 私は八書六経を読んだぞ。

ソンビ…八書六経はどんなもので 六経はなんだ？  
チョレイン…私も知っている六経、そんなことも知らないのですか。八万大蔵経、僧のパレ経、安売り眼鏡、薬局の

桔梗の根、処女、月経

イメ…そうだ そうだ！

両班…この者たちも知っている六経を、いわゆるソンビたちは知らないのか？

といった内容で、物を知らないとされている下僕たちの話に両班

が同意してしまうことによって、結局は両班も学者もさっぱり物を知らないことが判明するという会話である。こうした会話を両班役と学者役にさせることによって、いつも威張っている者達が、実はこんな程度であるときき下ろすことで、庶民たちは溜飲を下げることになる。

この後、登場人物たちは和解して一緒に踊り、楽しく踊っているところにイメが「還財を！」と叫ぶ。一回目の叫びで踊っていた人たちは面くらいい、二回目に叫ぶとぶるぶる震えて怯え、三回目に叫ぶとみんな慌てふためいて逃げる。イメもそれを追って退場し、会場は無人となり、仮面劇は終わる。正式にはこの後、祭りに関わった人々や村人も一緒に裏山の洞舎に戻り、陽のあるうちは農楽などで楽しく遊ぶが、日が落ちて暗くなると村人を帰し、演者たちも使用した仮面を管理役に返し、関係者数人と両班役、闇氏役だけを残して帰宅する。両班と闇氏の婚礼・初夜が行われ、堂祭を行って神送りをし、クツが全て終わる。

観光用には第五科場まで演じられ、第五科場終了後無人となった舞台上に登場人物・農楽隊全員が再び登場し、観客に挨拶するカーテンコールで終了となる。

#### 4 まとめにかえて

以上、見てきたように、仮面劇は非常に演劇性の高いものであ

るが、河回村の仮面劇における演者たちの意識は、かつては神意によって選ばれたものであり、断ると神罰が下るという意識が強かった。仮面に神を見ているというより、神を楽しませるために演じるのだという意識があり、そのへんは新野の雪祭りの演者たちが神そのものになるという意識が強かった点と異なる。ただ、闇氏は土を踏まない、人間と同じ位置に立たないといった演じ方を見ると神そのものであるという意識によって演じられていると見ることもできる。別神クツの行われ方や、仮面劇の最後に両班と闇氏の婚礼・初夜の儀礼が伝えられていたところを見ると、仮面劇も祭祀の一端として行われていたであろうことは容易に推測できる。婚礼と初夜には、豊穣を祈るための予祝的な意味合いがあったことは明確である。単純に日本の祭りと比較することはできないが、長野県下伊那郡阿南町新野の雪祭りの執行目的と同義の要素が見られるほか、仮面をつけて演じる人々に神意を見ていることも共通しているといえるだろう。

日帝時代の中で、祭のあり方も日本の意志によって村人のこのまざる方向に流され、伝承が途絶えそうになった時代を経ているために、伝承者の記憶もあいまいとなり、現在行われているものが元来の姿で演じられているのかどうかは分からない。しかし、それでもなおお村の人々は何とか復元して後世に伝えようという意識の元に祭りは継承されている。河回の仮面劇を見ると死後いい所に行けるといった伝承からしても、単なる楽しみとして演じら

れていたのではないことが充分理解できる。演じるものも、それを見るものも、神意に逆らうことよって起きる災厄に対する恐れは勿論だが、人々の長い人生の中における仮面劇を演じたり見たりすることの意味や、意識の中における仮面劇の位置づけといったものを、もう少し調査分析してみる必要性を強く感じる。

ただ、観光客用に「見せる」ために演じる期間が長くなっているため、演者たちは客に喜んでもらうための工夫もしているのではないかとも思われ、特に台詞の内容はいつの時代のものを伝承しているのかが気になるのである。現在、村は表向き身分の差はないように見えるが、元両班も庶民も元下層民も祭りをどのように見て、受け止めているのかは、現代社会の中での階層意識を考える上で改めて分析を試みる必要がある。人々が芸人の芸に近いもの、として割り切っているのならともかくであるが、もともとは祭りの一つの過程の中で、神遊びのために演じられていた素朴な民俗芸能であった仮面劇は、韓国の方がより洗練された「見せるため」の芸能化が進んでいると見ることもできる。

安東市では国際仮面フェスティバルなども行われており、河回村の仮面劇もそうしたフェスティバルにも参加している。今後の更なる演劇化も予測される。観光化が進む河回村の社会的な変化が、この仮面劇にどのような影響を与えるかも継続的に見つけていく必要がある。新野の雪祭りにも同様のことが言え、日韓の古い祭りと言われている二つの祭りにおける仮面を用いた神

事・劇(戯)の今後に興味は尽きない。

〔追記〕本稿は倉石美都「韓国仮面戯にみる円の象徴性」(日本大学大学院芸術学研究科修士論文二〇〇四年)の助けを借りた。また、写真は二〇〇七年河回村を訪れた折に撮影したものを基本としたが、仮面劇についてはより場面が分かるよう安東市H.P.他をお借りし、各写真にアドレスを記載した。記してお礼申し上げる。

#### 参考文献

完訳『三国遺事』一然著 金思燁訳 明石書店 一九九七年十一月

金宅圭『日韓民俗文化比較論』九州大学出版会 二〇〇〇年五月

三品彰英『新羅花郎の研究』三品彰英論文集第六卷 平凡社 一九七四年七月

田耕旭『韓国仮面劇』野村伸一監訳 李美江訳 法政大学出版局 二〇〇四年十月

李杜鉉『韓国仮面劇』서울대학교出版局 一九九四年七月

#### 注

(1) 田耕旭『韓国仮面劇 その歴史と原理』(野村伸一監訳 李美江訳 法政大学出版局 二〇〇四年十月)の仮面劇の歴史中の整理によれば、李杜鉉はその起源を山台都監劇系統と城隍祭タルノリが起源といい(『韓国の仮面劇』一志社『韓国仮面劇』ソウル大学校出版部 一九九四年)、趙東一は(農楽隊が主導した豊農クツ起源説『タルチュムの歴史と原理』弘盛社 一九七九年などによる)を主張しており、この二人の説が現在の学界における最新の研究成果であると述べている。

(2) 近年上演されて話題になった『王の男』などは、暴君として名高い燕山時代の芸人の様子が描かれ興味深い。両班などに招かれて、綱渡りなどの芸を披露するが、ただ綱渡りをするだけでなく両班や王のスキャンダルなどを話題にすることによって、庶民の溜飲を下げる。最初の綱渡り芸の場面の会話も以下のようなものである。

開城最高の妓生ミヒヤンを物にしようとする両班を演じる男性役(以下 男)と妓生ミヒヤン(以下 女 ただし、演じているのは勿論男である)役の会話である。尚、会話は字幕内容に従った。

綱の上にいる女に向かい、男が女をものにしようと声をかける。女は自分のいるところまで来るように誘い掛け、男が綱を登って両班らしく威張って扇をかざしてゆったりと歩いていくそのすきに、女は綱から下り、下から綱の上の男に声をかける。

女：なんておばかなの。ここをどこだと思っているのよ。

男：ここは俺の家だ。おれはこの主だ(両班だ)。

めん玉ひんむいてよく見ている。主らしい歩き方をしてやるから。

女：あの面構えじゃ どうせ下衆な野郎ね。礼服もどこかでくすねてきたんでしよう。(男のゆっくりした歩き方を見て) 金玉袋がのびきったような歩き方。気が短い人はたまったもんじゃないわね。

男：あーゆっくりしている間に糞が出てしまっそうだ……(会話の流れと何の関係もないがこうしたクソだのショウベンだのという言葉が、出てくることによって両班の品格を落とす効果を狙っている)

今度はあの女よその亭主とのナニがばれて、あたふたと逃げる様子を見せてやるからよくみている。

さらに会話は卑猥にエスカレートし、最後に小便がしたくなったという男に対して、女は「どうせなら合体しましょうよ」と誘いかける。こ

うした会話をしながらの芸を、芸人を招いた両班は屋内で、庶民は門内に入って立ち見をしている。

芸を演じる芸人たちはそれぞれに仮面をつけているが、仮面は手作りのようなごく素朴な面である。が、芸人たちは稼ぎが終わると面を壁などにかけて大切に扱っている。この映画が、どの程度の時代考証がされているか不明であるが、少なくとも劇中劇部分の仮面劇においては、民俗芸能等の研究成果は踏まえているように思われる。

(3) 成 炳禧「河回村別神仮面劇(原題「河回村별신탈놀이」)『仮面劇歳時風俗産育』民俗学会編 一九九〇年五月 教文社

なお、原題の탈놀이は正式に約せば仮面遊びとなるだろうが、仮面劇で統一した。

(4) 慶尚北道(キョンサンブクト) 安東市(アンドンシ) 豊川面(ブンチヨンミョン) 河回里(ハフエリ) Ⅱ경상북도 안동시 풍천면 하회리

(5) 安東市ホームページの河回村の紹介記事などには、「一九九九年にイギリスのエリザベス女王が来訪したことで、それまで韓国人の目には、どこにもある田舎町としか映らなかったこの場所が、「韓国の伝統が息づく村」と世界の人々からも注目を浴びるようになったことが紹介されている。また、韓国旅行ガイドブックには「三百年から五百年前の韓国土の伝統家屋が立ち並び、現在でも人々が昔のままに暮らす村。湖畔の美しい風景が広がり、その周辺景観の素晴らしさ」という紹介もされ、あわせて韓流ブームの影響で、ドラマ出演やカーレースなどで活躍しているリュウ シオンが両班柳氏の宗家の末裔であることもこの村を有名にしている。

(6) 神木はテッチエ峠のカエデの木を伐ってくる。

(7) 倉石美都が二〇〇四年から二〇〇五年にかけて修士論文作成のための

調査を行った折の資料の助けを借りた。

(8) 李杜鉉『韓国仮面劇』ソウル大学出版部  
一九九四年七月による。

(9) イメの仮面については、以下のような伝説がある。

許道令は夢で仮面を作るよう神のお告げを聞いた。そして作業場に他の人を入れず、毎日沐浴齋戒して全身全力を注ぎ、仮面を製作していた。ところが許道令を思慕している処女(じつは城隍神であるともいわれる)が、その恋情を抑えきれずに許道令を訪ね、作業場を覗き見する。許道令はその覗いている処女を見てしまったために、禁断の仕事場であるその場で吐血して急死してしまう。このとき作成していたのが、最後の仮面「イメ」である。したがって、イメの仮面は未完成のまま、だから顎がないと言われている。人々は急死した許道令の霊を慰めるために城隍堂近くに壇を設けて、祭りをを行うのだという。

なお、李杜鉉『韓国仮面劇』によれば、「仮面製作者にまつわる伝説は許道令という名前と安道令という名前が伝えられているが、許道令説に識者層の指示が多い」と記述されている。

